

## 第二部会

「プロテスタンティズムの哲学者カント」説  
の成立背景

後藤 正英

「プロテスタンティズムの哲学者」というカント理解は、いつ頃にもどのような経緯を経て成立したものなのだろうか。この点を明らかにするための手掛かりとして、本発表では一九世紀末のカント解釈史に注目する。今日の私たちの哲学史上の常識は一九世紀に形成されたものが多いわけだが、プロテスタンティズムの立場にもとづくカント解釈もこの時期に確定したことが推測されるからである。

特に本発表で取り上げるのは、フリードリヒ・パウルゼン (Friedrich Paulsen, 1846-1908) のカント解釈である。パウルゼンは、アディッケスやファイヒンガーと並んで、文献学的カント学者として活躍した人物であるが、一般には教育哲学者としての活動の方がよく知られている。パウルゼンには「カント プロテスタンティズムの哲学者」(一八九九年) という論文があり、『カント その生涯と思想』(初版・一八九八年) の中でも同様の問題への言及がある。パウルゼンの論文は当時の知的雰囲気をよく伝えている点で注目に値する。パウルゼンがカントを殊更にプロテスタンティズムの哲学者として称揚した

背景には、文化闘争直後のヨーロッパの思想状況があった。すなわち、パウルゼンは、理性と信仰の関係をめぐる議論の中で、カトリックの「新トマス主義」に対抗しうる哲学者としてカントを称揚したのである。

文化闘争は、教皇ピウス九世の時代に始まり、レオ一三世の時代に終息した。レオ一三世は、政治的には前教皇よりも妥協的な立場をとったが、トマス哲学をカトリック世界の精神的支柱として再生させるうえで極めて大きな役割を果たした。レオ一三世は、近代世界においてトマス哲学を再興するために、一八七九年に有名な回勅『エテルニ・パトリス』を發布した。この回勅は「新トマス主義」の思想的潮流を生み出す推進力となった。

このような知的雰囲気の中で、カトリック系の哲学者からプロテスタントの哲学者への批判が展開された。特にパウルゼンが念頭においていたのは、カトリック系の哲学者オットー・ヴィルマン (Otto Willmann, 1839-1920) によるカント批判であった。オットー・ヴィルマンは、パウルゼンと同じく、教育哲学者しても名を知られた人物であった。ヴィルマンの基本的立場は、大著『観念論の歴史』(一八九四―一八九七) の第三部「近代の観念論」の中で展開されている。ヴィルマンは、近代以降の理性概念の主観化が偽物の観念論を生み出したのである、そのような潮流の代表者がカントであると解釈した。

パウルゼンは、ヴィルマンに代表されるようなカント批判に対して、カントを擁護しようとした。パウルゼンの理解では、知性の独断論に対抗し、外的な権威に対して良心の自由を強調

## 第2部会

した点で、宗教改革からカントへの道筋は一本線につながっている。パウルゼンによると、カントが批判の対象としたヴォルフ哲学は、中世カトリックのスコラ哲学の再現といつてよい存在であった。パウルゼンは、思弁的理性にもとづく独断論であるという点で、カトリックとカント以前の合理主義の哲学者を共通の批判の組上に乗せようとした。さらに、パウルゼンによれば、カントの理性の自律は、ルターが信仰に関して地上の外的権威に服従することを批判した点と軌を一にしている。教皇でさえも誤りうるのであり、カントが自らの内なる良心を真理の最終根拠にしたことは、ルターの問題と一致するのである。

## ドストエフスキーとカント

元 春 智 裕

ゴロソフケルの著書『ドストエフスキーとカント―カラマゾフの兄弟』とカントの「純粹理性批判」についての一読者の思索』(Голосыкер Я.С., Достоевский и Кант, 1963. モスクワ)は、本書の副題が示すように、ドストエフスキーがいかにかントの『純粹理性批判』を読んだのかということがテーマであり、ドストエフスキーによるカント批判を扱ったユニークな内容となっている。

『カラマゾフの兄弟』の中に、カントが『純粹理性批判』「先験的弁証論」におけるアンチノミーの問題が、登場人物の

対話の前提となっていることを、ゴロソフケルは指摘している。①世界は時間においてははじめを持ち、空間においてその広がり何らかの限界を持っているのか、それとも世界は無限で永遠なのか? ②どこかに(もしかしたら、私の思惟する《われ》の中なりとも)分割できず破壊されない統一が存在するか、それともすべては分割され、破壊されうるのか? ③私は自分の行為において自由であるのか、それとも、他の存在と同じように、自然と事物と自然の秩序は私たちがあらゆる研究を通じて問題にすべき最後の対象であるか? ④世界の最高原因は存在するのか、それとも、自然の事物と自然の秩序は私たちがあらゆる研究を通じて問題にすべき最後の対象であるか?

カント的アンチテーゼ(無神論)を体現したイワンの知性の悲劇を中心に議論が進められていく。カラマゾフ老人を殺したのは科学であり、無神論的な自由な知性、哲学の知性、イワンの知性がカラマゾフ老人を殺した。この知性が象徴的な悪魔II殺人犯ということになる。「もし神がいなければすべてが許される」というイワンの語る命題は、カントの「先験的弁証論」におけるアンチノミーを前提としている。イワンの知性が最終的に破綻し、イワンの思想を忠実に実行したスメルジャコフは自殺し、また、イワンも狂気へと追いやられてしまう。

カント自身は道徳的な実践理性の領域における定言命令により、このアンチノミーの両極端における無限の往復運動からの脱出を図った。しかし、ドストエフスキーにおいてはそうした解決はとられなかった。良心の声のうちに神の存在を感じていながら、神があるかないかを知らないというイワンの知性の